

TAPP 法で修復した Spigelian ヘルニアの 1 例

函館五稜郭病院外科

佐藤 慧、石村 陸、村松里沙、藤野紘貴、川岸涼子、千葉丈広、
木村聡元、米澤仁志、木村 仁、船渡 治、小林 慎、高金明典

【はじめに】 Spigelian ヘルニアは腹壁ヘルニアの約 2% に発症する比較的稀なヘルニアである。今回、TAPP 法で修復した Spigelian ヘルニアの 1 例を経験したので報告する。

【症例】 50 歳代、女性。急な右下腹痛で前医を受診し、CT で右腹直筋外縁に 10mm 大の腹壁の欠損と脂肪組織の陥入を認め、腹壁ヘルニアの疑いにて当科紹介となった。診察の際、腹部の膨隆や疼痛は認めなかったが、審査腹腔鏡の可能性も同意の上、手術の方針とした。

【手術】 3port を挿入し腹腔鏡下手術を開始した。腹直筋外縁に 10mm 大のヘルニア門が明らかとなり、内鼠径輪に近接していたことから、TAPP 法で修復した。手術時間は 97 分、出血は少量であった。

【考察】 Spigelian ヘルニアは稀な疾患で臨床所見にも乏しく診断が困難であるが、本症例は腹腔鏡下手術が診断や治療に有用であったと考えられた。